
討論

高山 高橋さんの報告は、現在における保守自民党支配の基盤とその変化を通じて農民の政治意識、あるいはその背後にある農業自体、あるいは村落の構造の変化をおさえていく報告だったと思います。直に討論に入りたいので、何か質問がございましたら出していただきたい。

問 今日の主眼点は今までめられた点になるわけですか。

高橋 農民主体のいろいろな側面から、主体的成長ということがありましたが、農民の政治的な面も主体と考えられる。それがどういう状態

にあるのかということを話題提供の意味で話しました。

関 関とくに政治的なことですね。

高橋 はいそうです。

君塚 兼業農民の姿勢をいわれたが現実の農業経営では兼業農家より専業農家の矛盾は厳しい。経済面では専業農民が苦しい。大変な労働を強いられている。

高橋 これは地帯によってかなり違う。そういう政治意識を最近調査しないのでわかりませんが、東北あたりで労働市場の少いところでは、下層農民が政治意識が革新的で上層の方をおしていく。近郊地帯では土地持ち労働者が保守的になる。全体的に専業農民も特に革新的といふわけではないが中間層化してくるという傾向はかつてあった。僕は幻想だとさかんにいつたんですが、農協体制の中で良くなるんじゃないか、良くなるんじやないかと、矛盾があるから余計補助金を貰つてしまいたい、という形でのびていいみたい。それでいいのかということです。今日の農村構造をつくり出しているのは自民党政治ですからそれが何んとか變つて貰わねば困る訳です。

岩本 山形なんかでは兼業農民もいろいろ不満は持っているが、専業農民の農政に対する不信は大変強い。ところが投票では今まで通り。一つは革新の方が農村に入りこめないということもある。まあ一つは自民党が何十年もやつていればそれが天下党で主体的とか何んとか云いながら補助金をいかにして貰うかという風な、だから逆に主体的再編成なんかでみていっても、農民の方に何か動きがあるとすぐ行政の側にとりこまれてしまつて、結果的には権力の安定にしか役立たぬ。そういう点で非常に否定的な感じがある。

島崎 これは今日だけの研究会討論でなく、もう少し広めて今日のも含めてこれまでの三つを一応討議した方がいいと思う。最初に関先生の

どういう主旨の説明の報告かという質問に政治的主体にしほつたと答えたが、聞いていて政治的主体の説明になつていなかつた。政治勢力の結集を保守革新がそれぞれどう行つているのかという文脈でなら若干はわかつた。保守の方は非常に官僚的機構である。これは明らか。それに対して革新の方は政治勢力の結集が遅れている。これも実際に明らかです。その場合保守の方は政治勢力の結集を官僚機構を通して非常に精力的に行う。その場合その官僚機構の最末端のところで一体部落が生きているのか問題になる。生きているとすればどうして生きているのか問題になる。そういうところまで下りないとこの政治的にも主体の規定にもならないと思う。それが問題として当然大きく残されているという説明であった。その政治的意味での主体の規定をどうやっていくか。これは今年の課題で今まで研究会を二度続けて来たのですが、九州の座談会と東北の座談会の仕方と非常に違う。これは大問題だと僕は思う。今まで村研には一つの何んかトーンみたいなのがあってそれで討論して来た。その頭で読んだ方は、九州の討論会の座談会は非常に意外に読んだ方が多いのではないか。実は私もそうだった。こういう課題が出されて来た背景にはやっぱり「村は生きている」式の風潮があつたと思う。それでそのイデオロギーづくりがあったと思うが。そういう中で課題が設定され研究会が用意されてきたという筋があると僕は思う。それにもかかわらず農政に割合深くタッチされている方の座談会の発言にはかなりファンクショナリズムの線が出てきている。部落を規定するにもこれは操作概念でいいじゃないかという、「村は生きている」と主張された方の発言でそう云つてはいるわけです。その辺の農政とそれから今の地域農政のあり方の問題と具体的には農振の指導のあり方、そこに非常に大きな問題が一つ、九州の座談会では指摘されていると思う。それを一つ主体

の問題と農政の方向との問題の中で論議していただきたいと思う。も

う一つは東北での座談会だが、これは伝統的と云つてしまつと申訳ないが、かなり伝統的な村研の研究報告の延長線上に討議が行われていてよくわかると思う。にもかかわらずこの課題がいつたいどうしたことから出されたかに対して、皆非常に不信感をもつて討議されているのがよくわかる。実は僕もこの課題がよくわからない。今年当初の研究会できましたと思うが、課題設定に当つて主体的再編成というがありますり論議されずにきまつた面がある。その点で今これが問題にし得るかをめぐって東北の座談会が紛糾していると思う。そういう中で今日は総括的なまとめて討論会を持っていることと思うが、それが主体的再編成自体わからないからこの討論の中で論議しなければならないと思う。特に政治的な意味での主体の問題を出されたと思う。先にも云いましたが、私は、政治勢力の結集の情況を話されたのであって、主体の規定はまだ問題として残っていると思う。当然課題は村落生活の変化と現状の主体的再編成という風になっていて必ずしも政治的主体に限つていいない。勿論トップの問題として政治的主体の問題がとり出されるべきですが、その前にもう少し下りたところで村落生活の主体的再編成といつのはいったい何かという、村落生活の主体がもう農民だけではない現実が非常に多いわけです。その前に村落とは何かという伝統的問題もあるわけです。一応そういうつきめたい方でなくいえば村に住んでいるのは農民だけではないから、その村づくりなり村落生活づくりなりの主体が農民だとは限らない。その辺を考えながら論議が進まなければいけないと思う。

高山 島崎先生からの提案で、勿論今日の報告が一つの柱ですが、この前の二回の研究会それをめぐつてもご意見なり疑問なり出していただきたいたい。高橋さん、今の島崎さんの最初の主体の問題についてどうで

すか。

高橋 今日の報告とは少し別の問題なので、からんでいる様であつて、その点は僕は逃げているというより語りにくいからなんですが。こういう気がしている。必ずしも政治的な主体形成だけを考えているのではないが最後にはそこに行きつかざるを得ない。村落生活ということだけを念頭においているのではなくて、農村地域全体の中に農村地域を内からつくつてゆくエネルギーが生み出されなければいけないんではないかという気がします。私は地方の山間地帯の出身でそこにはいろんな人間が生きてる。一方で日本の資本主義によって地方社会が、破壊されていく。単にそういう側面からだけでなく、もっと大きな問題として資本主義の問題がある。それを抜きにして語れないという議論がありましたが、それを語ると同時に運命論的な形でだけで地方社会の形成課程を論ずるのはまずいだろうと。自分が生まれ育った町あるいは友人たちがそれなりに村をつくり町をつくる努力をしている。そういうのが歴史の流れの中で結果的に評価されていく。それがある方向性をもつ様な中で位置づけることも考えねばならない。それをすぐ政治的主体というかたちにもつていくのは、僕はあまり賛成ではない。今日は自民党の政治支配ということでみたわけですがそういう形でたくさん人間が生きてる。どう位置づけどう評価してゆくか考えてみたいというのが、この主体形成ということで多少もつてある問題意識です。

東 島崎さんのおっしゃる三つを全部含めた議論にはいかないのだが、村落生活の現状と変化、その主体的再編成をめぐつてという場合、村落といわれるものには非常に地帶性があると思う。その中には多少非農業的因素が混っているが、それは前提として、しかし農業生産が主産業として成立する農村という風にある程度限定して考えた方がいい。

その場合、専業であれ兼業であれ農業を営んでいる人たちの行動や意識がどうでない諸要素に対してもどんな関係をもつか、規定するのかされるのか、その関係を実体としてどこかではっきり把握する必要がある。やや形式主義的なが農業経営の中における変化を意識の問題にあらわす。

が問題になつた。破壊とその破壊に対しても再編成という言葉が非常に強く、逆の側面がでてくるといふことが破壊されないんだと、島崎さんおっしゃった様に、生きているんだと去年のテーマのあり方の逆という形でも出されていると思う。

民との間にどういう関係を持つかを、どこかで議論する必要がある。ささやかな私の経験ですが、私の個人のゼミナールに三〇頭ほどの酪農をやっている青年がいる。彼は農業經營というものにかなりの責任をもち生産力的な観点を問いつめる姿勢がある。尚かつ政治的中立にすぎこまれ、補助金行政につられるのではなく、もう少し高いレベルで自分の意識を解放してゆかねばならぬということころまできている生産力主義もある。それぞれの経営は一つ一つ懸命にやっているよううみえるが、実は上から与えられた技術や出荷体系の中に気動的にくみこまれている形の經營主義生産力主義的なレベルということです。違う面もあるわけで、その辺が実態調査の中でどう出てくるのだろうか。主体的再編成を考える場合の一つの重要なデーターになると思います。

「結局は曰く」をなと出した方の着想は、前提は「村は生きている」という議論だと思います。村は生きているとよくこのごろありますね。そういう議論が。村は生きている、生きているとしたら主体がいるだろう、それなら明快なんで。もっとも村は生きているという議論がおかしいとなると、これはディスカッションしなければ駄目だということです。

高山 たしかに経緯はそうですが、むしろ破壊はされていないんだ、村は生きているんだと、そちらの側面で受けたということではないのですか。去年の島崎さんの報告にはつきり現われている様に、一つの村落というか部落を基盤にしながらそれが抵抗の基盤にもなり得るという形で、資本の圧力で破壊されながらそれに抵抗していくものとして

の部落の認識が一面あった。そういう構み方ではないですか。

島崎 なる程ね、資本の問題はどこかへ行ってしまったんですね。

高山 エー行つてしまつてあると思います。

島崎 そうなりますと「村は生きている」村はどういうものです。

島崎 それは永遠に村研の課題ですから。

島崎 行つてしまつたともいいきれない。いつてしまつたという形でどちらえている人もいれば絶対にそういう議論になつたといかない人もいる。特に島崎さんあたりはいかないと思う。たとえば島崎さんがこの主体的再編成についてどういう問題意識を入れていくのか、あつたら出して貰いたい。

島崎 今、僕は最大限の善意でもって解説し説明したわけです。その時の主張はもうこゝで農村自治をやろうという、むしろ自治の方が主体の問題としては非常に明確であると思っていたわけですが。そういう提案を斟酌しながら宿題委員が主体的再編成という風に苦肉の策でつけた題名ではないかと思います。

島崎 ですから両面あると思います。確に自治をとり上げると島崎さんだけでなくいくつか要望がでてました。そういうものとかゝわる中で主体的再編成ということが一つは出でてきていると思う。もう一つは今いいました村は生きていると、伝統的村は生きているというそれを踏まえて、新しい方向を模索していくこうとのあると思う。では二つは全く別かというと、あるところでかゝわるところもある。自治の問題を議論する場合、現に存在する部落を全然無視して農村自治論を展開するわけにはゆかないと思う。

島崎 だから農政の方向をあまりイデオロギッシュ的に受取るのはよくないわけですが、農林省のいろいろな調査の中での生産力担当層の担い手をどう考えていったらいいのかというのはかなりいろいろな報告

が出ている。それを一つ受けていると考えていいと思う。最も基礎的には生産力の破壊された状況に対する農民としての再編なり展望なりをこの辺で少し論議したいというのは、やはり最も眞面目な受取り方だと思う。それと、さつき僕云いました様に、今地域農政のもつ一つのイデオロギッシュな面、これは村が生きているという言葉に象徴される様な一つの側面、これがもう一つあると思う。それから破壊という課題のあとにその破壊のところでもう一回ここで農民としてはそれに対してどういう風に主体的にとり組んでいくのかが問題。一応トーンとしてはその三つ考えられるのではないかと思ひます。これは僕の受取り方で他の人からいろいろな意見出していただきたいと思います。

島崎 でもこれある程度考えておかないと大会になつたらどうもならん様になつてしまします。

島崎 それは課題委員が今回まとめてくるということになつてるのであります。今日は実はその会合をかねていて僕らはみていいと思う。

岩本 ただ主体的再編成という、何らかの形での農村のあり方、農業のあり方は考えなくてはならぬと思うが、自分が歴史の人間なのでつい新しい問題は考えにくい。例えば宮城県などで県庁が首頭とりでやつてゐるふるまと作り運動とか、あるいはあちこちの地域でのモデルコミュニティがつくられている事例をもつてきて地帶性云々の議論はおかしい。そうでない形のものでもつて引出しこなければならないと強く思います。それは調査の仕方によると思う。何か紹介して貰つておせん立の中の筋だけのものを持ってきて、それが主体的どうのこうのというレベルの議論に終るのではないか。これは調査に入る一つの心がまえという気もしますが。

島崎 それと現在農村の問題と割合からみ合つて出てくるのだが歴史学の中でも論争があるわけでしょう。民衆史と経済史がある。民衆とい

うのはどれだけ歴史の形成に関与できるのか、それが大衆闘争史観というかどうか知りませんが、そういう議論があるわけです。そうしたものとどこかでかかわると思う。資本主義が構造的に動かしてくるけれど、その中でどの程度かかわり得るのか、かかわっているのか、又どの程度の限界があるのか、どこかで結びついていると思うのですが。

岩本 僕は経済史と民衆史と矛盾してはならないと思う。僕自身あまり矛盾しているという意識はないが、僕が今までやってきたことは一揆とかよりも日常的な農民の動きの中から経済の行動や何なんかのあり方をみるという方法なので、逆によく階級的視点が欠如しているといわれているが。今までの主体的再編成というようなことを主張する人たちのある部分に恐らく良心的だが現代に対する焦燥感といふか、階級とか何んとか叫んでいる次元ではないので、民族とか人類とかいうところまでいきなり論理が飛躍してしまっていける様な気がする。そこからでてくる発想がいいのかといふと、これは歴史的にみても何回も体制の危機の問題があり、その度ごとに、仙台の座談会でも云つていてが、農村を必ず何んとかどうするという風に上からあればかかづくるわけです。今の何かこう風土づくりの運動もそういうものの何回めかの一つではないのか、その辺の見極めがほしい。

高橋 今のこと、この間の抜刷でも主張しておられたが、その場合たとえばコミュニティづくりが上からてきて、さつと擦くわれる。擦くわれるのでなく下から作り出していくような歴史の可能性に対してもう少し展望を考えるような方法なり議論なりは行われている方がいいと思います。

岩本 たとえば例の後藤総一郎さんたちの考え方では共同体を否定してしまうことに非常に大きな疑問をもつ。たしかに共同体は歴史的現実としてはマイナス面を持つたが、そうでなく機能しうる部分があつたんでは

ないかということを過去にさかのぼって考えてそれを前提にして共同体をどうこう云つてはいる。過去において歴史的現実としてマイナスの役割を果したもののがプラスになるという保障はどうもないような気がします。

東 農村又は村の自治を問題にする場合には、この自治を構成する主体が自立した思考で行動しうる主体として形成されているということ是非常に重要な前提になる。村落の中の主体が、かなり農業的性格のこい村落で農民個人の行動様式を決定するのに個として自立しているのか、あるいは又少くとも家と他の家との関係で自立しているかどうか、生産基盤ではそれに強制される。そういう関係が解体しているにもかかわらず、生活の領域で、政治も生活の領域に入るが、行動を規律するのは本当に自立したものかどうか認識しその根柢を考えることで、自治を構成する主体に対して自らを主張する大前提だと私は考える。生産の中でかかわりあいが消えたのに、しかし、自分の死後とか老人をかかえている時に、ばあさんの後のことを考えてみると自立した思考がなし得ない状況がある。こうした現状において、生産の領域で農業所得は少くほどんど兼業がすすみ家計レベルがかなりのところ達していくも、個として自立しうる充分な根柢は充分そなわっていとは云い難い。又もう一つ、集落とか大字とかに農政のスポットライトが当つてきたのは比較的新しいことで、その前は中央公民館システム、行政権を単位とした広域でおさえる思考が多かつた。ある一定の時期から集落が問題になつて来て、部落公民館とか部落を単位として、政策の意図の中でいえば、やっぱり總ぐるみ擦い上げる方向でしよう。それを批判的にとらえて積極化する。個々の家々その他のが規定するという諸関係から解放する意味で部落の中に建物がつくられていくということは、部落の中で個人を規制しているものをとり除いてい

くという観点でとらえ直すのはやはり重要と思う。自治の主体として

の個の存在を把握する作業が一つの重要な課題だと思っているのです。

その後のことどうするかは非常に重要な問題ですが。

島崎 自治の主体であるべき個が確立したのかしないかという問題は、

問題提起の原則論としては先ずそうでしょう。そこから考え方直すと、

戦後日本の農民というのは分割地農民なのかどうかというかっての議論になるし、もう少しくだいて云えば独立自営農民であるということとを政治的に使う人もいる。そういう議論は不毛と思う。理論問題としてやるならまず農地改革論をやらなければならん。もつとさかのばれば明治維新論をやらねばならぬことになる。そこで、村研は実証を

もとにしてやるのだから、そのことは討議の中で常に永遠の課題として、論理の出発としてやらねばならぬことは前提だが、もう少しだいたところで設定しないと二進も三進も行かなくなる。日本の農民は個が確立しない前に部落ぐるみ縦くづれになつたという現状だと思うのです。部落ぐるみ破壊された、破壊されかねない様な現状になつたところで、農林省の方から、大谷さんの本から云えば、落ちるところまで落ちたからこれら出直しだという議論もある。落ちるところ、こわれるところにまでこわれたからってところで、開き直ってこれから農業出直しなんだということではすまないんです。現状は確かに部落ぐるみ落ちるところまで落ちたんだが、そこで、こわれっぱなしではないのだろうというところで問題設定したんでしょう。やっぱり個の確立というのはイデーとしては常にもつて居る問題・発想だと思います。

東 そういうふうに抽象化しないで、こうした問題意識をふまえた実証的な、現段階に即応した問題提起が昭和五〇年代の現状の中で提起されて来た時に、この主体的再編成という意図の如何にかかわらず生

産的な議論になつてくるんじゃないですか。

島崎 現在の戦後たどりついた日本資本主義の現状の中で個としての農民のあるべき姿を検討するということですか。

東 積極的にあるべき姿というとゾーレンになりますがザインでけつこうなんですか。

島崎 ザインに果して問題があるかどうか。

東 それが問題なんで、あるといふ考え方もある。ないのではないかという考え方もある。これは或る程度そうでないとみ合わなくなるんじゃなかといふ気がします。

島崎 原則論にね。

東 え、そうです、なつてしまひます。

高山 今の前段の方の問題で、たとえば九州の報告の場合、破壊されない集落と、集落的共同体的結合が破壊されてしまった場合と二つ対比しながら報告しています。その時出されているのは村落という形の結合があるからその生産力が維持されかつ生活も維持されている。そうしますと、個として自立しているという問題と村落の問題ですね。特に村落的結合があることによる一つの生産力の問題、村落的結合がないと日本の現段階においても、自立できないというか生きていかれないという議論もある。そうすると現段階の問題としてとり上げる。即ち前提の問題は生産基盤における強制又は結合的なものが解体してしまったという前提で東さんの議論がすすめられた。そうでないんだという議論もある。そうすると現段階の問題としてとり上げると、集落のもつ單に生活基盤の問題ではない。生産基盤的な性格をどうとらえるのか、そしてそれをどういう形でもう一度生かしてゆくのか、そういうことがここの中に一つ出されていると思う。だから問題自身、すぐ生産基盤における強制力といいますか又結合が解体したということを前提にする議論に対しても問題が出される可能性があります。

ありますね。

岩本 古い部落がそのまま生きているというのは、そういうもののがなくなつたが、たまたまそこにいた人達が入つてるので継続しているようにも見える。どうも別種のものと考えていませんが。

高山 それは別種だしその村落の結合状況が一つの生産力的なものとして結果する条件として、その村落内部における農家の構成が比較的均質化しているということを云つておられる。これはやっぱり均質化しているというのはどういうことなのかというところから出発しないと、かつてのような共同体的な形で包摵された農家ではないと思う。

岩本 東北の例と似ている。九州でもこういうタイプが出て来ているのかな、という感じで聞いた。むしろ古い部落があつたからそれがあるんじゃないかと僕はみていた。

高山 古い部落の問題でなくないんです。地域的な農民の結合が、丁度古い部落の結合であつても一つの生産力的な力を持ちえるのかどう

か、そのことが一つ村落再編成における主体の問題とかかわってこないだろうか。主体と云つた場合に村落がある程度村落自身が主体になり得るかどうか問題ではないかと云ふことです。

岩本 そうなんですね。

高山 いや僕は別に肯定していいてるわけではなくて、そういう問題が一つ、ここの中に出されでは来ませんかということがあると云つてゐるわけです。

岩本 たまたま現在の状態でそういうような形が行われているということがあります。それを行うに当つておそらく農民の側の非常な要望があつたろうし、それに対してもいろいろな補助金もきたかも知れない。長い目でみた時そこで行われる農業経営的なものが成功するのか、変なことになるのか結果が出ていないわけですが。

高山 たしかにここでもいくつかの条件として挙げられているが、同質の農民がある程度多数存在していれば、そこに新しい技術が入つた時、それを消化しその経験をお互に伝えあう形でその全体の生産力レベルを上げる条件は出来ます。孤立しているよりはね。それが村落の機能かというと一つ一つの機能をみてゆくと決して村落的結合の機能じゃないような気がする。

岩本 僕もそう思う。

君塚 私も同じみかん産地でどんどん兼業化してゆく集落とそうでない集落とみて、兼業農家が円をなしていればいいが、分散耕地ですから兼業農家のみかん園が年々荒れしていくとその周辺全体が病気にかかりやすい。それが崩壊につながつてますます兼業化に拍車をかけていくと、きわだつた対比をしてみられてはいるが、農業を維持して農業で大多数が生きてゆきたいが生きてゆけないということで農家自身が大変な状態におかれている。この農業を維持していく結果は決して古い共同体のイメージでは考えられない。そういう意味で九州の調査報告は非常に貴重だと思うが、これが一般的になり得る条件としては、そういう意味で実態としては崩壊した点にあるのではある。東北と九州の報告を読んで、原則的には東北の議論が基本にある。これには疑問の余地はないと思うが、もつときめ細かにみていくこうという姿勢は九州の調査の報告の中に際立つていて、身近かな具体的な事実、又経営の実体によれていくような村研のいき方。僕らは経営の方ですから具体的な場面で農家の悩みを擱んでゆく。例えばみかん共同でがつちりやつてているところは構造改善の資金がへつても自らの經營に合うようにちゃんと使つていくだろうと。農民の主体的力は苦しくなればなる程出てくる。これは農民の土根性と思うが、又冷害の場合には一軒一軒の農業のやり方の差が際立つて見える。農民自体が主体的にとりく

まねばならぬが現実は兼業にひっぱられていかざるを得ないという報告がだつたが、これをつなげながら議論を深めていくのが今度の報告ですか。

高橋 同じ事ですが違う面から議論しますと東北の先生方の過疎の調査に全面的評価が行われているとは思わない。僕が寄った時間いたのは農林省や県のいうとおりやつたんじゃない。我々がやつたんだと云うことです。自分たちの先祖がやってくれた様に自分たちも子孫のためにやっておいてやりたいと。集落移転の際には広場をかこんで下水までつくり陽当たりの良いところに計画的な村を作った。そういう点をもう少し積極的にくみとつて統していく歴史の中でそれがどういう意味をもつのか考える必要がある。先程いわれた経営の面でもそうですがいろんな努力があると思う。永い歴史の形成の中で積極的な上からの視点だけでなく自分たちがもり込み自分たちの社会の歴史でしかあり得ないものを形成していく面があるのでないかという問題意識を持つているんです。

岩本 その人たちは自分たちがやつたとして逆に思いこまされているということ。行政の方の入り込み方は非常に巧みです。そういうものを主体的にやらせているという形で入りこんでいく。もしそれが本当に主体的になつて別の方向を向き出したらつぶしますよ。そちら辺の兼ねあいだと思います。どこでも移つた方の人たちは楽観的希望的です。これでいいのかなーという感じです。

閑 非常にいい問題をとり上げていただきたい。ただ共同体論、抽象的な共同体論におちこんでしまうと結局穩りの少いものになつてしまふから、今日も話しあつた東北と九州の報告、この主眼点を具体的にある程度までそろえて貰つたら、その方が東北と九州の地域の違いや何や比較できて、共通論題は少くともそういう形でお願いできたらと

思います。私自身が西日本ばかりやってきて、今度関東の畑作地域の問題を少しひとり上げたら非常に違うのです。その辺の問題、又現代はその辺とも違いますが、ことに生産とか経営の内容の問題を、ある程度まで九州やっている方に東北をとり上げてもらえれば相当いろいろな意味での違いがあつて、それを通して、現代の村落生活の変化と現状という共通の問題にアプローチできるんではないか。共同体論の抽象理論があんまりそっちに深入りするとかえって穏りの少いものになつてしまふ。私、決して共同経営だけをとり上げていいというのではなく、むしろその点では現在の農村では共同経営をとり上げたのでは農村の全貌を描えたことはなんらんという感じもしているのです。

高山 他に、全体の今年の共同課題に対する意見なり考え方なりありますか。

吉沢 君塚先生と同じことになりますが、去年の大会に出席した印象で安達先生の提起された問題が非常に重要な意味を持つたと思う。九州のみかんの話で、ある農協の広域農政ということでやつてきたが結局、部落単位の土地管理、これさつきのみかん園の放棄というのが崩壊につながるという問題ですが、そこでやはり一定の範囲での土地管理が非常に重要だとそれが村的なものだという主張であったと思うが。つまり現代の農村においてなお共同体というと語弊があるが、地域的な一定の管理が要請されている。そういういくつかの事例を安達さんが報告され、それをストレートに受けたのが今話題になつたものだと思う。例の集落単位の協業化という問題も出てますので今度村研でその辺をどういう性格の共同性なのか討議することが一つの課題ではないですか。

閑 出きたらこういう形で東北の方も誰方がやって貰えたら……
君塚 そういう農村があつたら非常にレアーケースです。一般的には個別分散型になつていく。兼業し、いつれ農家でなくなつっていくという。

農業はますます衰退していくという風に。

関

山形あたりの果樹園とか、その目でみたらあるのではないですか。

岩本 果樹園はむしろ桜んぼを作りすぎて青息吐息だし、出荷の際の連合だとえばどうに開して本沢農協というのがあるが、これは本沢というレッテルでもって売れる商品を作り上げたのですがその辺だけが成功しているという感じです。防除は共同でやっているが個別的な生産管理や何かは非常に分散した型で出荷体制でレッテルを一つにするという型の様です。あとは非常に特殊で、ジャーナリズムがとり上げるので有名になった高畠の有機農法——一種の自然農法ですが——これは僕は非常にネガティブにしか考えません。

東 農業を非常に重要な部分としている経営の経営的性質を分析をふ

まえて、諸関係を明らかにする。そしてその諸関係が非農業的住民も含めて村でどのように展開するかが重要な論点と思う。今の議論では農業経営を専業している人、又は農家だけによって構成される村における生産の諸関係と、そこに由来する生活領域の諸関係が抽出された形で問題になってしまふ。抽出は次の議論には非常に進歩だが、諸関係が全体としてどういう意味をもつか準備された上でないと、その抽出は村落生活の変化というテーマから遊離してくるのではないか。それから生産の面における経営と経営の相互の関係が生産力としても大きな意味をもつという態勢としてはくずれているにもかかわらず、生活の領域では個人あるいは家の行動様式、政治まで含んで特殊な共同的な諸関係の中で形成されるものが残っている。その根源は何か、我々はそれをどう考えたらいいのかという観点が欲しい。庄内の集団栽培が、蒲原のような相対譲負のような形で個別経営化していくことがすう勢としては、すう勢であつて、レアケースだと云ふことです、では一般的なケースの場合、さつきいった観点でどこから実証報告

があつて欲しい。

高山

たしかにそうです。長さんの報告で第一事例と第二事例があります。第一事例は任意組合等の運営型で、集落をこえてその機能主義的なあるいは種目を選択して最も利益がある様な型で結合がすすめられていく。一面任意組合の型をとるがそれには限界があつて、任意組合では村落の土地という形で全部の土地を利用できないからもう一面では村落の中に一つ組合を作らねばならないという型でもう一つ村落的な型の組合が作られるという報告です。二つの問題は絶えず対抗しながら、一面で蒲原の請負耕作の様なことで進んでくると村落的な形での領土の観念が打ち破られていくというかあまり制約的条件にならない場合と、なお制約的な条件になる場合と両方対抗しているんじやないか。その辺をどうみきわめていくか一つ問題提起としてあって、一般的な形で集団栽培等が解体し個別的な形での請負耕作が進展していく。これは水稻地帯ですがこれが一番基本線ではないか。その基本線が本当に生産力的な展開にとってどんな意味があるのかまでは問題は出されていないと思う。もう一度、村落のこういう形での土地の問題、結局一定範囲の土地管理をどう考えるのか一つ提起していくことという感じはする。

関

むつかしい。しかし実際村落の中に農業が殆どそれ程の意味を持たない村もありますし。ここで云っているのは基盤であり、その上に村落のいろいろな生活がなり立つわけですが、一時にするわけにはいかない。ことに都市近郊だったら果して農村と云えるかどうかというところが多い。

君塚

愛知県の試験場におられた西尾さんが、請負で個別的形式で規模拡大して最初部落ぐるみですが、事例一のような形できただがそれがもう限界だと云うのです。もう一度村の問題を抜きにしては考えられない。

その場合の村はもう昔の村ではない。近郊で兼業でいる混住社会、しかしそこに農地があつてそれをどう管理していくかの問題は依然として残っている。経営ではとても解決できない。つながつてある村の土地をどう生産力を維持しながらやっていくかということで村の問題にかえつてきているとあちこちに書いておられるが。それはこの研究会あたりで答えていただきたい大きな問題だと思います。農政もそれで困つて地域農政対策事業団を生み出した。これは不景気になると大体そうなるようですが。

中野 最近、経営先進的農家を中心として目的的機能集団化という態勢を一つの村落の主体的再編成の問題としてどう評価するかが問題ですが、昭和三〇年代にもやはり経営先進主義的農家が中心になって経営の集團化等いろいろあつた。しかしそれは保守側に吸い上げられていつたという経過があるが、あの頃の事態と現在の事態で主体的条件にどういう変化があるのか。勿論客観的条件で違うでしょうが。先程東さんのお話しの農家の若い方が大学で勉強に来ている場合、経営的発展を追求するというところで意識の問題ですが、何か従来とは違った意識の変りようを追求しているという話でしたが、その辺どういう主体的客観的条件がある場合に、かつてのよう保守にすっかり吸い上げられる農民でなく新しい農民の意識変革があり得るのかが一番知りたい。どうも悲観的かもしれません、又過去のように吸い上げられるようになります。

東 その意味で批判的だが肯定的にとらえるという云い方をした。その青年は酪農技術はマスターした。そして一生懸命やればやる程、技術をとりまく諸関係を勉強しないと自分たちの技術の発展はないという認識をするようになつた。社会関係について勉強したいということです。そういう意欲が培養されてきたのは観念の中で形成されて来た

のではなく、彼自身もっともすぐれた技術者として成長する過程で意欲が形成されることに着目するわけです。もう一つ彼の様な專業農家の行動様式というのが他の非農家の要素に対しても規定力をもち得るのは検討していい。都市に兼業でて行って都市的空気が農村に持ち込まれるというのは太いパイプとして存在しているのは多數証明しているが、特に農業的な要素の大きい村落でそれに合せて実証的な報告がされたらある程度生産的な議論になると思います。

高山 ではこれで今日の研究会は終りにしたいと思います。ここではあって結論をつけない方がいいと思います。研究通信にこういう議論があったと出して下さったと出してください。勿論、宿題委員会等で検討いたします。どこまで検討できて統一できるかわかりませんが、今日の会は終りになります。どうも有難うございました。